

# シカ捕獲手法検討結果の概要(知床岬)

1 捕獲目標頭数について  
 越冬数全体を600頭とするその約半数の300頭がメス成獣となる。ただし、メス成獣のみを選択的に捕獲する手法を用いない場合の目標数は300頭となる。

2 捕獲時期と輸送手段について  
 越冬群が集まっている12月～4月までが捕獲可能な期間である。ただし12月時点ではまだ越冬地への集結が完了しておらず、4月には越冬地を離れる動きが始まるため、1月～3月の捕獲が最も効率が良い。選択する捕獲手法や場所にもよるが、同地域では希少鳥類の繁殖が確認されているため、2月以降に作業を実施する場合は制限が必要である。同地域へは道路での到達はできないので、物資や人員の運搬については船舶が動かせ機（ヘリコプター）が必要となる。船の場合は積氷の有無によって航行可能期間が限定される。例年1月下旬以降に積氷が停滞するため、船舶での人員や物資の輸送を前提とする場合は、捕獲期間を12月～1月中旬頃に設定する必要がある。なお、一度積氷が停滞すると、その後融氷しても氷塊が岩礁帯に残り、船をつけることができないうので、積氷が去る4月についても船舶での現地入りは困難である。ヘリコプターを使用する場合は、主として北地区（あるいは羅臼）、および現地（文吾島あるいは梅森島）の臨時ヘリポートを往復することとなる。

3 捕獲手法の検討について

捕獲手法	説明	想定される要素	主な課題・問題点	評価
1 箱ワナ	水型やネット製の箱状のワナで、内部に入ったシカがトリガーに連動された扉を引くことで入り口扉が閉鎖され捕獲が行われる。1頭ずつの捕獲となる。	森林内にできるだけ多数(20-30頭)の箱ワナを設置して捕獲を行う。ほかに、ワナのメンテナンスや捕獲動物の処分(殺処分or生体輸送)を行う。ワナの設置・調整作業を怠れば、数回程度は少ないが、長期間にわたる捕獲体制が必要である。	①極めて捕獲効率が低いので、長期間の捕獲体制をとっても目標数の達成は困難。 ②調整・設置の労力大	*：選択すべき手法ではない。
2 身動式曲いワナ(バルク・キヤブナー・ワナ)	斜みに立て式で移動可能な曲いワナ。中心部に扉を引く際、ワナが傾き、タイムラグをみてトリガーを引く。扉が約2mの高さに立ち上がり、シカを倒す。扉は(周囲30m)、10回につき、最大15頭程度捕獲可能。	風雪に強い構造のため、寒風への設置は困難である。森林内の傾斜(平川)に設置し、餌付け期間を十分にとって捕獲作業に臨む。捕獲後は迅速な搬送が求められるので、少なくとも10名以上のチーム編成で一定期間、現地で待機体制をとる必要がある。	①寒冷地仕様の設置環境ではないため、動作の確率が低い。 ②1ヶ所での餌付けでは広範囲からシカを集めることは困難。	*：選択すべき手法ではない。
3 大型曲いワナ	捕獲地の地形等に合わせ、高さ2.5m前後の金属フェンスで囲いワナを建設し、餌を誘引されたシカがフェンスの隙間から入り、ワナに倒れる。ワナに入ったシカを自動的に倒す。捕の処理にもよるが、1回につき、最大で20-30頭程度の捕獲が可能。	文吾島に面した台地(原)に延長300m程度の閉いワナを建設し、餌付け期間を十分にとって捕獲作業に臨む。捕獲後は迅速な搬送が求められるので、少なくとも10名以上のチーム編成で一定期間、現地で待機体制をとる必要がある。	①建設にともなう遺物・遺構の痕跡。 ②捕獲装置の建設コスト大。 ③1ヶ所での餌付け可能なシカの数は限られる。	*：選択すべき手法ではない。
4 追い込みワナ	一般的には、先に行くと捕獲可能なシカを誘引するワナを先に設置し、後に行くと捕獲可能なシカを誘引するワナを後に設置することで、ワナに入ったシカの逃去を防ぐ。シカの取り出しも容易となる。うまく行けば1日に数十頭程度の捕獲が可能。	林縁部に延長約3kmの樹指ネット製フェンスを設置する。フェンスの敷設時に出入り口を設け、多くのシカが原野部に出ている状況で出入り口を閉鎖し、森林部に戻れなくなるところを誘引が文字通りへつと追い込みいく。文吾島には強いワナを設置し、その中にシカを追い込んで捕獲する。30人以上の作業人員が必要となるが、管理時間は比較的少ない。捕獲後は迅速な搬送が必要。	①建設にともなう遺物・遺構の痕跡。 ②捕獲装置の建設コスト大。 ③樹指ネットへのオオシジカの絡まりなどの問題があり、難しい。	△：うまく行けば一度に入人数のシカの捕獲が可能であるが、遺物・遺構の痕跡やオオシジカの絡まりなどの問題があり、難しい。
5 くくりワナ	網み杭を駆動してワナにセットしたワイヤーが引き上げられることで、ワナを閉鎖する。餌を誘引するワナを先に設置し、餌を誘引するワナを後に設置することで、ワナに入ったシカを逃去を防ぐ。シカの取り出しも容易となる。うまく行けば1日に数十頭程度の捕獲が可能。	森林内のシカ道(ポイント)にできるだけ多数(50-100個)のくくりワナを設置して捕獲を行う。毎日1回以上を巡回し、ワナのメンテナンスや捕獲動物の処分(殺処分or生体輸送)を行う。数回程度は少ないが、長期間にわたる捕獲体制が必要である。	①極めて捕獲効率が低いので、長期間の捕獲体制をとっても目標数の達成は困難。 ②餌取りに大きな苦痛が伴い、動物福祉上の問題あり。 ③シカが網み杭に絡まる危険がある	*：選択すべき手法ではない。
6 銃器(定点)	見通しのよい場所や展望台のシカを定点から撃つ。メス成獣だけを選択的に捕獲する。餌付けポイントに餌を置くことで捕獲効率を上げる。餌を置くことができる。	知床岬灯台(第1号峰)、第2・第3号峰などには銃器を配置して、見通しのよい場所を確保する。また、林縁部にも銃器を配置し、森林部に誘引して、メス成獣だけを捕獲する。簡易フェンスを林縁部に設置して森林へシカの侵入を防ぐ。餌付けを行うなど、より捕獲効率を高める方法も検討可能。また比較的少ないチーム編成(10名程度)でも実施が可能である。	①射手は岩峰上等に早期、あるいは前夜から待機する必要がある。 ②餌取りに苦痛が伴い、動物福祉上の問題あり。 ③シカが網み杭に絡まる危険がある	◎：一定の成果も期待でき、かつ低コストであることから、継続的な実施を考えた場合、現実的な捕獲手法。まずはこの手法の実施・検証が必要。動物福祉的な観点からも最も推奨される。
7 銃器(巻き取り)	地形の特徴などを活用し、夜間にシカを誘引し、巻き取り銃でシカを捕獲する。メス成獣を優先的に捕獲する。	知床岬の森林部から積氷帯の170mビークを巻き取り、シカの移動を妨げる簡易フェンスを設置するなどの工夫が必要。作業人員は少なくとも20-30名は必要であるが、前期間での作業可能。	①フェンス等を併用しなければ、一定方向への誘引は困難。 ②巻き取り銃の構造に比べ、メス成獣以外の個体も巻き取り、射撃精度も落ちる。	◎：うまく行けば前期間での捕獲作業が可能であり、かつ低コストであるため、手法検討の余地はある。